

菊池短歌会

11月詠草

八十路余の齢を重ね満月を仰ぐもかなし杳かなる春秋
秋彼岸過ぐれば二感は研がれつつ遠き松籟はるか草の香
怒留湯健容
秋冷の下弦極まる月光よもはや日の出に溶けゆくごとし
村上さき江
秒針の摩れ違ふ時幽かなるためらひあれど長針乱れず
山下菊代
木犀の香り漂ふ庭に佇ち友との確執空に放たむ
山代静子
姉もなく久能街道駿河湾我がふるさとはもう遠くなる
余語やす子
白光を点すがに咲くトランペット起床喇叭の鳴り出づること
岩木妙子
青空に張る電線に作業するマリオネットの様な電工
岩永典子
阿蘇高原の芒は銀に光りつつ風のタクトはいまアンダンテ
氏岡百枝
いつの世に建ちしか古びし楼門を映して井手の流れ澄みたる
梅田昭子

万句の里俳句会

11月句会

秋蝶の草木の色にまぎれるし
初時雨記憶のひとつよみがえり
吉井綾子
ほろと翔びほろと傾く冬の蝶
丸山美代子
火の国の火の山越えて神の旅
岩木敬治
一病を庇ひつゝ菊咲かせたり
打出 貞
大鷹の弧をえがきつゝ舞ひ降りぬ
野中公枝
青空を挽ぎとる如く柿を挽ぐ
隈部輝子
風誘ひ風に誘はる落葉降る
田島房子
登り来て大師縁の大紅葉
加藤妙子
水音を包み込みたる紅葉山
北村妙子
鳥来ませ残しておきし木守柿
平山邦子
海鳴りに眠れぬ一夜冬の旅
宮本雅子

肥後狂句桜会

11月例会

静かに 半開きさす見舞い客
辻 弘喜
冷え込もうで のれんな肩で潜らした
田中孝幸
惚れちゃった 彼女とならば共白髪
高木房恵
正念場 恋は試験が済んでから
窪田明德
お金持ち 値段も見ずに買いおらす
藤野清子
草食系 彼女の手より美しか
光堀善教
どうなるの 夫婦仲良く認知症
狩野本六

せせらぎ俳句会

11月例会

秋深みすごきししそ穂の手に染みて匂いかぎ
矢野悦子
つつほころび繕う
新米と野菜、梨柿詰め詰むる田舎の秋を意の向くままに
高藤タツノ
完うされし天寿は清し紅葉散る
藤本邦浩
残されし句碑に散り敷く銀杏黄葉
内村泊虹
小春日に百一歳の師は逝きぬ
藤本アツ子
逝きし師の慰霊に供ふ菊一枝
服部静子
逝く秋や身罷り給ふ師を嘆き
寺本和子
小鉢で着崩れ直す菊師かな
五丁義昭
辞書も古り我れも老ひけり秋深む
村山教恵
朝露に光る葉今日も寒いねと
(高一)渡辺大寿
背伸びしてそれでもみかんまだ取れず
(高一)渡辺一史

肥後狂句水笑会

11月例会

つつ掛けで 側溝またぎひん脱げた
御手洗三代
つつ掛けで 追っかけて来たお弁当
吉岡三水

七城短歌会

11月詠草

冷え込んで 三毛も加勢する炬燵番
神尾迫水
冷え込んで もはや喧嘩もできぬ仲
続 義昭
たまがった まじりけ無しの七人目
井手水光
交通安全 青になるまで待たんかい
平井紅彩
気にするな なったごつしかならん娑婆
中島五女
気にするな ちくわで小言聞き流せ
宮上美由
つつ掛けで 飲み屋かよいも寒なった
柏原乗仏
冷え込んで し瓶のスペア置いとらす
山隈好茶
紅白の山茶花咲けば佳き事のあるよなおもひ
心躍らす
斉藤芳子
澄みわたる朝の天空ふり仰ぐ山路登れば小鳥
松岡みちえ
囀る
幼日は馳走の一つゆ干し柿を今の子どもら口にも入れぬ
池田カツ子
挽ぎたてのたちわけ戴き漬けしなに日付を記
木下陽子
せり食べ頃待つのみ
羽音立て隣家に群れ来し何鳥か鳴き声交わし
吉間充子
柿の実つつく

泗水短歌会

11月詠草

子ら送り音なき庭に秋の風人には人に木には木の風
長尾はるみ
花ミズキの紅葉落葉が芝庭に濃きもうすきも夕陽に映ゆる
中山定子
こつん、こつん杖の音重く試歩の道猫のピーコが後につきくる
平嶋きくえ
街の灯が点るがごとく濃緑にさわ成る柚子の黄が発光する
大島さと
菓とうべの田んぼなつかし熟れ稲にふれも見もせぬ今日日の稲収納
増田久美子
鴨遊ぶ朝の町川中州より教師囲める子等の声湧く
吉安永子
富有柿たった五ツが色づきぬ今年裏年役目を果たす
福原美智子

旭志文芸俳句会

11月詠草

我家建つ槌音高し昼の月
水谷ミネ
京の水肌になつかし秋の旅
東 芳子
遠阿蘇や木の実の落つる朝の冷え
芹川蓉子
落人の御霊和むか里の秋
中尾ヨシコ
いつからを余生と言わむ鱈雲
芹川のり子

おわびと訂正
広報きくち12月号里短歌会で紹介した名前に誤りがありました。正しくは次のとおりです。

誤 山代 雅子 誤 宮本 雅子
正 山城 雅子 正 宮本 淑子
おわびして訂正します。